

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 現代日本語における形容詞的動詞をめぐって
- 連体修飾の「ル」「テイル」「タ」形を中心に -

氏 名 CIFTCI Ummuhan

論 文 内 容 の 要 旨

現代日本語において「形容詞的動詞」という形態的には動詞を用い、意味的な属性や連体修飾要素として典型的な形容詞と同様の役割を果たしている形式が存在する。ある意味、動詞の形容詞らしさが現れているとも言え、動詞を形容詞に転用して構成するこの用法は「切れる包丁」「空いている席」「変わった人」などのように後置された名詞の状態・性質を表す特徴を有する。この場合は時制の接尾辞となる「ル」「テイル」「タ」が付いている動詞は役割として単独のまま形容詞の振る舞いをしている。また、「隠された真実」「故障している機械」「込み入った話」「目立つダイヤ」などのような「動詞＋受け身＋タ＋名詞」、「漢語サ変動詞＋テイル＋名詞」、「複合動詞＋ル・タ＋名詞」、の構成から成り立つ様々なパターンも見られる。

こういった形式は日本語では「形容詞的動詞」以外に「形状動詞」とも呼ばれ、多くの言語や欧語文法では「分詞」と言われている動詞の用法である。言語学大辞典(2003)によると、欧語では動詞と形容詞の機能を併せもった「分詞」(participle)と呼ばれる品詞が「現在分詞」(present participle)と「過去分詞」(past participle)の二つに分けられ、これらの分詞類は多くの言語に一般的だとされている。

但し、日本語の場合、概念上この形容詞的な動詞用法は「分詞」と呼ばれていない。ゆえに、今までこの形式のものは「形容詞的動詞」か「形状動詞」と言われてきたのであろう。筆者もそれに従って、寺村(1984)に用いられた用語である「形容詞的動詞」という表現を使うことにした。また、現在、単語自体は「形容詞的動詞」としてまだ完全に定着していないため、本論で研究の対象にしたのは、連体修飾用法つまり形容詞的用法といった形式であり、動詞の形容詞らしさに限定した。

寺村(1984)では「形容詞的動詞」とは述語文の場合「この作品が優れている」などのような形容詞的にのみ使われるものを表す用語とされているが、本研究では連体修飾に「ヲ・ニ・デ・ガ」など諸格を伴わず、基本形容詞と同様に単独のまま主に「ヒ

ト」の行状・性質・感情や「モノゴト・デキゴト」の状態・性質などを表し、動きを表さない用法を指す。

そして、連体修飾の一種である形態として、否定辞の「ナイ」が付き、名詞を形容する用法で用いられる形容詞的動詞も存在する。これらは「消えない・見えない・錆びない」などのような否定の意味を持つ動詞や「つまらない・くだらない」などのような否定の意味を持たない動詞であり、「消えないシミ」「見えない真実」「錆びない指輪」などのような「和語動詞＋ナイ＋名詞」形式構成や「つまらない話」「くだらない決まり」などのような固定化した形式構成で単独のまま形容詞的な働きが見られるものである。

「形容詞的動詞」には様々なタイプが存在しており、この動詞類には3つの基本形態が見られ、以下のようにまとめられる。

①和語動詞由来のもの（自動詞＋能動形 / 他動詞＋受動形）「痩せる・尖る・失う」など、（自動詞＋否定辞）「変わる・枯れる・足りる」など

②漢語形容詞由来のもの（サ変動詞を伴う用法）「満足する・独立する」など

③a.複合動詞由来のもの（自動詞＋能動形 / 他動詞＋受動形）「込み入る・有り触れる・積み重ねる・考え抜く」など

b.複合動詞由来のもの（名詞・形容詞・擬音＋動詞）形式「年取る・目立つ・古惚ける・ずば抜ける」など

以上における様々な形態を考察した結果、「形容詞的動詞」に用いられる動詞には自動詞と他動詞の関係が関わっており、特に和語動詞や複合動詞の場合「自動詞＋能動形」「他動詞＋受動形」でないと形容詞的動詞として成立できないということが確認された。従って、成立条件として最も重要な項目は自他の適合だとも言える。